

その4：「ロータリーでいう職業奉仕」

今を生きて咲き 今を生きて散る 花たち
今を忘れていき 今を忘れて過ごす 人間たち
ああ 花に恥かし 心いたむ日日

私の敬愛する詩人、坂村真民先生の詩です。真民先生の詩は、読む人の心の奥にじんと響きます。それは、語句の1つ1つが言霊（ことだま）の響きをもっているためでありましょう。

近年、日本で起こった職業倫理を疑ういろんな事件、雪印食品の牛肉偽装事件、雪印乳業の集団食中毒、薬害エイズ問題、外務省の機密費詐取事件、姉歯設計士の耐震偽造設計、ライブドアの問題、それ以前にもその他、金融機関の違法な融資など、不正・違法容認体質が暴かれました。

最近では、大手光学機器メーカー「オリンパス」の損失隠し疑惑。大王製紙の件は、論外です。

米国でも、エンロンやワールドコムを経営破たんが会計制度への不信を招き、市場は危機的様相を見せました。世界から「職業倫理基準」が消えたのでしょうか？

不正で会社が消える時代です。牛肉偽装事件を起こした雪印食品は2002年解散しました。不正の代償の大きさを、経営者、社員1人ひとりが自覚することが、会社の「自壊」「消滅」を防ぐ第一歩であります。経営者、社員1人ひとりに職業倫理が求められているのです。

このような事件の後には、決まって、企業における管理体系の見直しとか、罰則の強化とかの議論が起こります。日本でも、財務報告への経営者の宣誓書添付など法令順守の取り組み強化が検討され、日本経団連は、企業不祥事の防止策として、企業行動憲章の規定の強化と新規入会企業の同憲章遵守の宣誓書提出を決めました。

しかし、ここで問題なのは、「経営者の企業倫理の欠如」であります。まさに、**企業倫理、職業倫理が問われているのであります**。

「機械化」という坂村真民先生の詩があります。

何もかも 機械がしてくれる 世の中になり
一番大事な 心の働きが 鈍ってしまった
善悪の判断ができない 人間が増えてきた
特に 今の日本が そうである
野の鳥に聴け 野の花に聴け 原生林のブナに聴け

ロータリーは、先ほど話しましたように、その誕生の早い時期から、職業倫理を重要視し、これを地域社会に広げてきました。しかし、残念ながら、これまで起こった不祥事の関係者の中には、ロータリアンもいました。ロータリーが長年唱えてきた職業倫理は、何処へ行ったのでしょうか。

<江戸に学ぶ企業倫理>

企業は、資本・人材・モノなど社会の様々なコモンズ（＝公共財）をお借りして、事業を運営しています。企業が社会のコモンズをお借りする社会機関であるならば、そのコモンズを、より効率的に運用し、お客さまや社会のニーズに応えていかなければなりません。

しかし、「**どんな手段を用いても、経済的な利益を上げさえすれば、効率的な良い企業である**」という市場経済の一面だけを強調した価値観が全体を支配すれば、企業は社会から信頼を失ってしまいます。この溝を埋めるものが、**企業＝経営トップの倫理観**であります。企業倫理は、人間の根源的な幸せを願い、信頼という基盤に支えられた社会を構築するために、欠かせないものであります。

そして、いま日本人は、日本企業の倫理的なアイデンティティを見直すことが求められているのです。

欧米の企業倫理はキリスト教をバックボーンとしていますが、**日本人は精神的なバックボーンをどこに置いているのでしょうか？**

その一つとして考えられるのは、日本人がこれまで培ってきた倫理観の原点が江戸時代にあり、武士道に対するかたちで成立していた「**商人道**」に学ぶことが、私たちのアイデンティティを再認識するための一歩につながるのではないのでしょうか。

新渡戸稲造博士は『**武士道**』を1900年に英語で書き刊行されました。江戸時代が幕を閉じ30数年が経過してから、『**武士道**』は書かれたのです。

ベルギーの法学者ラブレールから、「日本に宗教教育がないのは理解できない。そんなことで、日本人はいつたいどのように子孫に道徳を伝えていけるのか」と問われたことが、その発刊の動機であったといわれています。

この**武士道精神を概念的な基礎とした江戸の商人道**は、**企業の社会的責任（＝CSR）に通じるものであり、現代の経営に対しても多くの示唆を含んでいる**と思います。**商売上の善悪という倫理だけではなく、経済と倫理は表裏一体のものであり、商いを通してより良く生きようとする者の心得と、社会へどのようにしてお役に立つのか、**という思想が読み取れるのであります。

<「三方よし」の理念すえながくにとし（同志社大学経済学部教授 末永國紀）>

皆様もご存知の、近江商人の「**売り手よし、買い手よし、世間よし**」という「**三方よし**」の経営理念は、商取引においては、**当事者の売り手と買い手だけでなく、その取引が社会全体の幸福につながるものでなければならない** という意味であります。

近江という現在の滋賀県に属する地域からは、江戸時代から明治期にわたって、近江商人と呼ばれる多くの大商人が次々に出現しました。彼らは近江に本宅を構え、行商の初期には上方の商品と地方物産の有無を通

もちくだけり
じる持下り商いに従事し、資産ができると要地に複数の出店を築き、産物廻しという持下り商いの大規模化した商法を出店間で実施して、さらに大きな富を蓄積したのです。

近江国外での他国行商を本務とした近江商人は、「行商先の人々の間に信用という目に見えない財産を築いていかなければならなかった。」のです。

持下り商いは、一回きりの売込みではなく、自分が見込んだ国や地域へ毎年出かけ、地縁や血縁もないところに得意先を開拓し、地盤を広げていかなければならないのであります。

異境を行商してまわり、異国に開いた出店を発展させようとする近江商人にとっては、もともと何のゆかりもなかった人々から、「信頼を得ることが肝心」でありました。その他国商いのための心構えを説いた近江商人の教えが、現代では「三方よし」という言葉に集約して表現されるようになったのであります。

「三方よし」の直接の原典となったのは、1754年に70歳となった麻布商のあざぶ中村治兵衛じへえ宗岸そうがんが、15歳の養嗣子ようしし（跡を継ぐもの、すなわち「嗣子」を養子として迎えた場合）に認めた書置のなかの次の一節であります。

「たとへ他国へ商内に参り候ても、この商内物、この国の人一切の人々、心よく着申され候ようと、自分の事に思はず、皆人よき様にと思い、高利望み申さずとかく天道のめぐみ次第と、ただその行く先の人を大切におもふべく候、それにては心安堵にて、身も息災、仏神の事、常々信心に致され候て、その国々へ入る時に、右の通りに心ざしをおこし申さるべく候事、第一に候」

現代文で言い換えると、

他国へ持下り商いに出かけた場合は、持参した商品に自信をもって、その国のすべての人々に気持よく使ってもらうようにと心がけ、その取引が人々の役に立つことをひたすら願い、損得はその結果次第であると思い定めて、自分の利益だけを考へて一挙に高利を望むようなことをせず、なによりも行商先の人々の立場を尊重することを第一に心がけるべきである。欲心を抑え、心身ともに健康に恵まれるためには、日頃から神仏への信心を厚くしておくことが大切である。

「三方よし」の原典となったこの条文は、明治になってから、まさとも井上政共編述『近江商人』の中で、「他国へ行商するも、総て我事のみと思わず、その国一切の人を大切にして、私利を貪ることなかれ、神仏のことは常に忘れざるよう致すべし」と、簡潔に要約されています。

では、これから、「ロータリーでいう職業奉仕」について、話したいと思います。

<職業奉仕月間>

さて、ロータリーのいろいろな特別月間は、以前は「週間」でありました。「月間」となったのは、1983 - 84年度からです。また、国際ロータリー理事会が職業奉仕週間を設けたのは1978 - 79年度です。

ところで、10月の職業奉仕月間について、皆さんはどういう風に理解しておられますか。職業奉仕をやる月間なのか、それともそれを理解する月間なのか。いろんな考え方が出来ると思いますが、私は職業奉仕理解月間であると思います。ですから、ある方はその月間に職業奉仕をやるのだという方もおられますけれども、そうじゃありません。日常やるのが職業奉仕で、その月間だけ職業奉仕をやるなんてことはない筈です。つまり、職業奉仕月間というのは、職業奉仕理解月間でなければならないと思います。

<ロータリーの綱領>

さて、ロータリーの綱領は、「有益な事業の基礎として、奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、・・・」という言葉で始まり、付帯事項の第2項に「事業及び専門職業の道徳的水準を高めること。あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること。そしてロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること。」と記されています。

これは、ロータリーの根幹が職業奉仕にあり、職業奉仕の窮極の目標が倫理規準遵守の運動であるということを示しています。

職業奉仕という考え方は、他の多くの奉仕団体にない、ロータリー特有の主義主張で、云わば、ロータリーの金看板といわれています。云いかえれば、ロータリーのロータリーたる所以は、この職業奉仕という考え方があるからだ、と言われている位大事な奉仕観念であります。

例えば、他の多くの奉仕団体は

ライオンズクラブは、「自由、知性、愛国」を目標に、「明るい社会へ身近な奉仕」を合言葉としております。

セルトマは「人類への奉仕」を、

オプチミストは「青少年への奉仕」を旗印として掲げ、

シヴィタンは交通安全を特に重点目標とし、

ルーリタンが都会と農村の結合を念願として活動、

キワニスは「人生の物質的価値より、人道的、精神的価値を重く見る」

ゾンタ・クラブは「働く婦人の力を集めて、世界平和の水先案内にならしましょう。」

ソロプチミスト・クラブは、ラテン語の「最善の姉妹」の意味で、立派な人格の婦人になることを目標としているように、色々の分野で、各々特徴のある理念を打出しております。

しかし、ロータリーのようにハッキリと「職業を通じての奉仕」Service through Businessという看板を掲げて活動しているものはありません。

<英語の辞書に見る職業・仕事の言葉>

ここで、英語の辞書で、職業とか仕事とかを現わすいくつかの言葉を探してみますと、

Job—英・英辞典ではpiece of work。要するに「こま切れ仕事」。「手間仕事」あるいは「請負仕事」をいいます。面白いことに、俗語で「悪事・強盗」もJobといえます。A bank jobは、銀行強盗です。動詞では、「仕事に関して不正を行う」「仕事を不正に利用する」というのがあります。言われてみれば、今の政治家、官僚という職業はJobであったのかと、改めて感心しています。

Work—これは単なる「労働」であります。日本人は働き好きだといわれますが、ただ身体を動かし汗を流すだけでは、単なるWorkに過ぎません。

Trade—これは動詞として「取引を」意味します。「物々交換」、「商売」さらに「貿易」を意味する言葉としても使われます。

Business—勤め人を一般にBusiness-manといいますが、ビジネスは「忙しい」busyという形容詞から出ています。「忙」という字は「心を亡くす」と書きますが、大事な心を失っているビジネスマンも多いです。

Employment—これはemploy「雇う」という動詞からくる言葉であります。英和辞典では「あてがわれた仕事」となっています。

Occupation—occupy という動詞からきている。つまり、時間、空間、場所等を占有することであり、単に会社の椅子、机を占有していることではない。ある仕事に専任している、その人ならば、と任務をまかされている、という感じである。

Profession—これは「主張する」、「公言する」などという意味の profess が名詞化したもので、「宣言」などという意味を持っているので、主に学習的職業や社会事業などに対して使われます。

Vocation—語源は voice「声」ですが、ただの声ではなく、「神の声」です。それで vocation は「神のお召し」であり、「天職」、「使命」という意味になってきます。

Calling—ドイツ語の Beruf「呼びかけ」であり、ある使命を果たすよう神から呼びかけられること。「召命」であります。

<職業奉仕 : Vocational Service>

ところで、職業奉仕は英語では、**Vocational Service** です。職業 Vocation と奉仕 Service とを結び合わせたロータリーの専門用語です。ロータリーでは、従来会員は職業分類に基づいて入会していましたから、会員は当然職業を持っています。Vocation は、「天職」「使命」という意味ですから、ロータリーではその使命に生きながら、Service をするのです。

又、Vocation という言葉は Voice=神の声=からきていますし、Vocational Service という時の Service には、「神に仕える」、「礼拝する」という意味がありますから、Vocational Service とは「神の声に身を捧げる」ということになります。1915 年のロータリー道徳律は明らかにそういうキリスト教的献身の精神で書かれているのです。

このように考えると、ロータリーでいう「Vocational Service」は、平準的な倫理規模を更に一步高めたものとして 認識されなければならないと思います。自分のひもじさを我慢して、先ず他者に奉仕することを喜びとするものなのであります。

<職業奉仕の意味は、間違えられ易い>

ところで皆様、こういう話をよく聞きますね。例会に遅刻した会員が、「職業奉仕に忙しくて例会に遅れた。」と言います。それはもちろん冗談でいっておられるのですが、職業奉仕とはそんなものじゃないですね。使い方が間違っているのです。

「職業を通じて社会に奉仕するのが、ロータリーの職業奉仕」なのです。仕事をすることが職業奉仕ではありません。

又こういう人がいます。職業奉仕についていろいろ詳しく話をすると、「要するに職業を通じて社会に奉仕することですね」と。「そうです、その通りです」と言いますと「いや、私の職業は直接公共事業をやって、社会に貢献しているのだから、それはそのまま職業奉仕になっています。職業奉仕を特にやらなくてもいいですね。」と。これも一つの理屈です。ところが、よく考えてください。社会に貢献しない職業、社会となんら関連のない職業なんて、あるはずがないのです。

ドラッカーも言っています。

「社会のニード（必要）に従ってあるのが職業だ、社会のニードのないところに職業があるはずがない」

昔からどんな職業だろうと、職業であるかぎり、みんな社会に貢献しているのは当たり前で、「自分の商売は非常に社会に貢献しているが、おまえの商売はちっとも貢献してないじゃないか」というようなことはあり得ないのです。

ではここで、世界中のロータリアンが職業奉仕をどのように定義しているか、その例をいくつか紹介します：

- 1 「職業奉仕は、職業に誇りをもち、正直かつ品位のある方法で職業を実践しようとするものです。」
- 2 「職業奉仕とは、生活の資(糧)を得る方法を、生きがいに変えるものです。」
- 3 「職業奉仕とは、職場で、そして、生活の中で、ロータリーを活かしていくことです。」
- 4 「職業奉仕は、働きよい職場をつくり、地域により一層奉仕することです。」
- 5 「職業奉仕とは、専門職業や、実業、工業、商業などにおける生活水準を向上させていくことです。」

これらの定義からも分かるように、職業奉仕にはいろいろな取り組み方があります。しかし、基盤は一つです：**「ロータリアンは、職業を通じて社会に貢献しなければならない」と**いうことです。

<ロータリーでいう職業奉仕の意味>

ここで、「ロータリーでいう職業奉仕」の意味を考えてみたいと思います。

人間はだれでも、初めのうちは自分のことしか考えない、他人のことなぞかまっちゃられないという **[Self] の時代**から、次は、自分のことばかり考えるのは、却って自分のためにもならない。他人と協調する方が、却って自分のためでもあるということに気がついて来る **[Fellowship] の時代**に入り、更に、他人と仲よくするだけでは共同社会の進歩はない。寧ろ積極的に「他人に奉仕することこそ、世の中を明るく豊かにする所以であると気づく **[Service] の時代**に入るものと云われております。

ロータリーも、初めはシカゴの市民生活が余りにも **[Self]** だけのすさまじいものだったことから、この **[Fellowship]** の段階から始まったのですが、やがてそれだけでは未だ足りない気がついて、所謂 **[Service]** の時代に入って行ったことは、先程の「**職業奉仕の発展の歴史**」で話しました。

皆さんもロータリークラブにお入りになって、奉仕の大切なことをお感じ取りになり、先ず自分自身を律するにロータリー精神を以てし、更には他人に対しては、出来得る限り相手の身になって考え行動しなくてはならないとお感じになっておられることと存じます。

職業についても、又全くこれと同じであります。先ず、ロータリー精神を以て経営され、社会に迷惑をかけるばかりでなく、進んでそのお役に立つよう配慮しなくてはならないことは 云うまでもありません。

ただ、職業には人格がありませんから、それに人格をつけるとすれば、その企業をやっている**経営者**ということになります。経営者が自分の人格を正しくすることと同じように、**企業の経営を正しい姿勢で行なう事**なのです。

即ち、「ロータリー精神」「奉仕の精神」をもってやるということです。別の言葉で言えば、「**The Four-Way Test**」の精神を汲み入れて、企業の道徳的規準を高め、その職業を通じて社会に貢献する。更に**この信条を同業者、或は友人達にも広めること**であります。そういうふうにしていって、「**職業を通じて、社会に奉仕する。**」のであります。

つまり、製品を作るなら、それを使う人の身になって、或いは、何とか世の中にプラスになるものはないか、という風に考えるということです。言い換えると、「**ロータリーでいう職業奉仕**」というのは、自分の職業に対し「**誇り**」と「**愛情**」を持って、その経営には最大級の努力は払うが、その方針は、単なる金儲けばかりを目的とするのではなく、所謂ロータリー精神、奉仕の精神で、或は「**The Four-Way Test**」の精神というようなものを汲み入れて、**企業の道徳的規準を高め、その職業を通じて社会に貢献する**。更にこの信条を同業者、或は友人達にも**広める**ことであります。

<自分の職業に誇を持つこと>

そういうことで、まず第一に、我々は、我々の職業に対して、「**誇り**」をもたなければなりません。「**誇り**」とは、自分の職業の「**社会的使命の重大性の認識**」であります。「自分の職業が社会生活に関連して、どれだけ重要性をもっているか」ということの**認識**が、「**誇り**」になるわけです。

近代最大の経済哲学者である「**マックス・ウェーバー**」も、彼の著書「**プロテスタンティズムの倫理と近代資本主義の精神**」という本の中で、「職業というものは非常に崇高なもので、単に便宜的に腰掛け的に、或は単に食うためにやるというようなものでなく、全人格を投入してやる価値のあるものであり、又その為には、他の一切の欲望を押えて、すべて禁欲的で敬虔な態度で臨まなくてはならない」と力説しております。

<職業に責任を持つこと>

次に、誇りばかり高くて、威張ってばかりいても困ります。誇りに対する「**責任**」を、持たねばなりません。次に話すのは、「**奉仕こそわがつとめ**」という本の中に出て来る話です。

(例) ニューヨークの機械商に、ロンドンから膨大な金額の引き合いがきました。

ところが値段がどうしても折り合わない。仕方がないので、社長自らニューヨークからロンドンに行って交渉しましたが、どうしても自分のいう通りの値段にならなかった。

仕方がないので、注文主の云い値で仮調印して表へ出ました。

クサクサしながら「**ボンド・ストリート**」を歩いていたら、スポーツにいいような洋服生地が売っていたので、それを買いました。そして、友だちから「**ボンド・ストリート**」に行ったら、イギリスで一番という仕立屋があるからそこへ行って仕立てて貰えと言われていたのを思いだしたので、その店に行って「この服地で私のゴルフ服をつくってくれ」と頼みました。

そうすると、その店の主人は、メガネを取りだして、うやうやしく生地を拝見していましたが、「お断わりします」という。「どうしていけないんだ。金はいくらでも出す」といっても「お断わりします」というばかり。「どうして貴方は断わるんだ。客がこれほど頼むのに何故できないのか」と聞くと、「この生地に、私のところのマークをつけて仕立てることはできません」と言う。「なにを生意気なことをいうか」と言って、彼はその服地をひたたくって表に飛びだしました。

しかし、二、三步あるいてハタとひざを打って、なるほど「これは自分の話じゃないか。」と気がついたのです。さっきの取引で、自分は自分のつけた値段なら、自信のあるスチールでちゃんとした機械をつくって、納めることができるのに、大分値切られた。それなら二流品のスチールでつくれば、勘定に合うと思って仮契約したんだけど、いまの洋服屋の一言で、「その機械にうちのマークをはらなくちゃいかん」ということに気がついたのです。

そして、「うちの会社が、そういう材料で機械をつくって納めてもいいものか」と反省し、あわてて取引相手の会社にひきかえし、「これこれで、さっきは仮契約したけれども、申しわけないがご破算にしてほしい。私のところはもういいから、ほかの会社と取引してくれ。」と言いました。相手はびっくりして、「それはどういうわけだ」と言うので、いまの洋服屋の話をして、「自分は二番手のスチールを使って機械をつくろうと思ったんだが、今の洋服屋の話で急に良心が許さなくなったからやめたいのだ。」と説明したら、イギリス人も感心して、それではというので、最初の申出の値段で取引が成立したということです。めでたし、めでたしというわけです。

<経営の努力>

さらに、誇や責任だけでは事業は発展しません。そこには当然「**事業経営の努力**」が必要なことは言う迄もありません。

(例1)「ロータリーの友」に出ていたあるロータリアンの話です。その人は、例会は勿論アッセンブリーにもフォーラムにも必ず出席する。地区大会にもチャーターナイトにも出るし、所謂多少「ロタキチ」と云われる程熱心な会員でしたが、どうしたことが、彼の店は左前になってしまいました。これは一体どうしてくれるのか、とその人は訴えていました。

しかし、果たしてこれがほんとうのロータリアンでしょうか！アッセンブリーに出るとか、フォーラムに出るとかというのは、勿論、出席して得るものも多けれど、仕事をしないで、仕事をサボってそのような会に出席するのは、いかがでしょうか。ロータリーの本当の精神は、先ず自分の仕事を真面目に真剣に取り組んでやるということです。それを忘れて、いろいろな会合に出ることばかりやって、それで自他ともに許す熱心なロータリアンと思うところが、ロータリーというものがわかっていない証拠です。

仕事があって初めてロータリーがあるのです。ロータリーがあって仕事があるのではありません。

ロータリーも大事ですが、仕事はもっと大切なものです。

<“The Four-Way Test” : 「四つのテスト」>

さて、先ほど話に出ました「四つのテスト」ですが、歴史のところでも話したように、**職業人としてのロータリアンの心構えを、倫理基準として述べたものが1915年に誕生した「ロータリー道徳律」**であります。この「ロータリー道徳律」は、ロータリアンの職業上の倫理観を成文化したものであるであります。

それをロータリアンのみならず 一般の職業人にも理解できるように、簡潔かつ的確にまとめられたものが、ハーバート・テラーが1932年に作成した「四つのテスト」であります。

この「四つのテスト」は、世界中で、多くの人々に愛用されています。日本でも、例会で「四つのテスト」を唱和したり、「四つのテスト」の歌を歌っています。

以前、米国、西海岸のロータリークラブにメイク・アップする機会がありましたが、或るクラブでは、例会で会長の時間に会員に唱和するよう求めていましたし、別のクラブでは、再入会の会員に 会長がバッジをつける際、「四つのテスト」を言えなければ入会を認めない(冗談で)と言っていました。「四つのテスト」は、**簡潔かつ的確な職業奉仕の基本である**といえます。

ロータリーでは、「ロータリー精神」「奉仕の精神」と云われても、解かっているようで、漠然として解からないと言われる方には、この「The Four-Way Test」に照らして、事業を経営して貰いたいとっております。

「四つのテスト」がロータリーに入ることになったきっかけは、1939年、ハーバート・テラーが商工会議所で話をした時、偶然、シカゴ・クラブの二人のロータリアンが居合わせ、「四つのテスト」の存在を知りました。そして、「四つのテスト」があまりにも素晴らしいので、全ロータリアンの職業奉仕の指針にしたいという声があがり、1943年1月RI理事会はロータリーに採用を決定し、ハーバート・テラーがRI会長に就任した1954年に、その著作権がロータリーに寄付されました。

日本語の訳文については、原文の精神が適切に表現されていないとする指摘もあり、幾つかの翻訳が試みられています。

「四つのテスト」は、その内心を行動に移す場合のアプローチとして、まことに簡単且つ効果的でありませぬ。発案者テラーはこう云っております。

「このテストは行動への尺度であって、掟ではない」

“The Test is a measuring stick for conduct, not a code” と。

ザ・ロータリアンに載っていた実例の一つを紹介します。東京RCの小林雅一さんの話です。

第二次大戦後、日本のロータリー再建に尽し、RIの第二副会長も務められ、やがては、日本人最初のRI会長と目されていた小林さんは、不幸にも途中で亡くなりました。

この人が内外編物会社の社長として、戦後間もなくアメリカへ商談に行かれた時のことです。何分にも相手は初対面の人々ではあるし、又戦争による敵意が未だ消え去らぬ時でもあったので、不安の気持が一杯でありました。

小林さんは恐る恐る切り出しました。「私は皆さんに初めてお目にかかる次第で、その上商売上のシキタリもよく存じませぬ。しかしながら、私たちは全て“The Four-Way Test”の精神に則ってご相談したいと思います。」と言い、四つのテストを印刷した紙を席上の人々に回してから、彼はこう言いました。

「これは私がロータリーで知った案内役です。これをシッカリ守っておれば、間違いないと思っておりますし、今日はこの精神を体して、ここに皆様とお会いしておるのであります。」と。席上の人々は、その中幾人かはロータリアンであるということが後で判りましたが、その四つのテストを読んでみて、会議の空気は急に和やかになりました。この四つのテストの精神こそは、取引関係に織込みたいと、彼等自身が望んでいた精神だったからでした。交渉はトントン拍子に進み、談笑の中に、双方に好ましい商談が成立したということです。

以上、述べて来た事からも分かるように、職業奉仕にはいろいろな取り組み方があります。

しかし、基盤は一つです：**「ロータリアンは、職業を通じて社会に貢献しなければならない」**ということです。

多くのロータリアンは、「職業奉仕は、難しい」とか、或いは、「職業奉仕は解からない」とか、言いますが、決して難しいもの、解からないものでは、ございませぬ。それは今日、この「**ロータリーでいう職業奉仕**」を聞かれて、お解かりになられると思ひます。

「職業奉仕とは何か」ということについて、ロータリーの創始者ポール・ハリスは、その自叙伝『ロータリーへの私の道』の中で、こう言っています。

「ロータリーの会員は、そのひとりひとりが、自分の職業とロータリーの理想とを結ぶ『環』（・・輪、リングですね・・）『環』である」と。

会員は、自己の職業の代表者としてロータリーに入会したのですから、同僚ロータリアンに対しては自己の職業の代表者となり、ロータリアン以外の人、特に職業上の知己に対しては、ロータリー精神を普及する責務を負います。この二つの責務が職業奉仕の基盤となります。

このように考えると、ロータリーの他の奉仕部門（クラブ奉仕、社会奉仕および国際奉仕）が、クラブ会員全員による協力活動を強調しているのに対して、**職業奉仕は、ロータリアンひとりひとりが、職業に携わっている中で、自ら奉仕することを主として強調しています。**

ロータリアンは、職業奉仕の基本として、自分に次のように問いかけなければなりません。「他の人にもう少し優しくなり、力になってあげるために、日常の仕事の中で何ができるだろうか」。というのは、職業奉仕は、日々この基本を実践しなければならないものだからです。

さあ、ここまで話をしますと、お解かりでしょうか。これから、まとめに入りたいと思います。

職業奉仕とは、一言で言えば、なんですか？

職業奉仕とは、一言で言えば「自分の毎日やっていることを、” The Four-Way Test” に照らしてやるんだ」ということです。

これほど簡単で、これほど手近に出来る奉仕はありません。しかし、実践することは、難しいことです。「自分の毎日やっていることを 一生懸命やる、正しくやるんだ。」ということです。

もう少し詳しく言いますと、

「自分の事業に精を出し、Profit(物質的・精神的な恩恵)を得て事業を発展させると共に、従業員にそのProfitを分かち合い、取引業者ともProfitを分かち合い、その上、同業者にも そのノウハウを開示し、Profitを分かち合い、そして地域社会へ自分が得たProfitを還元し、それを国際社会にも広げていくこと」であります。

事業に精を出すときは、ロータリーで得た経験を生かし、ロータリー精神に則ることが大事であります。従業員も、取引業者も、世間も、「**道を踏み外して得たProfit**」は、**喜びません**。正しいことをして、心に恥じない仕事をして、即ち**倫理基準を遵守して得たProfit**なら、喜んで受けてくれるでしょう。

1911年、シェルドンは、「取引というものは両当事者間に精神的満足がなければ安定した長期の利潤を確保できない、**倫理性を持った商行為だけが信用という無形の財産を築き、それによって事業が繁栄するのだ。**」
「また仮に非道徳的な方法で物質的に成功したとしても、それでその人が精神的に満足出来るであろうか。**精神的な満足のない成功は成功ではない**。何故なら人生に於ける成功、不成功の価値判断は一にかかって精神の満足度にあるからだ」と述べています。

「成功」という山に登る時、裏の道を通って山の頂上に登り、その傍ら奉仕をする人がいるかもしれません。或いは、法に触れない範囲であくどい商売をして大儲けし、事業を発展させ、有名になり、社会福祉に寄付をする人もいるかもしれません。しかし、ロータリーはそういう奉仕は望んでいないのです。

人の価値というものは、結果ではなく、その**人生の過程(プロセス)**であります。その生涯をどのように生きたかということでもあります。

ロータリーから見たときに、邪道と思われる道を通らず、
ひたすら正道である奉仕の道を登って成功という山の頂上に出ること。
そこまで完結して、初めてロータリーという職業奉仕が出来たこととなります。

佐藤千寿 PDG は、次のように述べられています。

ロータリーでは、仮に事業の規模が小さくても、^{そうてんいっしゅこう}蒼天一炷香・・・

皆さん、目を瞑って思い浮べてください。

青い大空の下、広い野原の中に一本の線香が立っている。たった一本の細い小さな線香、誰も気付かず通り過ぎてしまう一本の線香。然し、辺りに何かいい匂いが漂っている。誰一人見向いてくれなくても線香は独りひっそりと燃え続けている。そして、かすかにいい香を残して消えてゆく。

・・・これが、蒼天一炷香です。

ロータリーでは、この様な市井の善人を理想としています。そういう人が数多く集まることによってこそ、明るい幸せな社会が出来るのです。シカゴ・クラブの初期の会員を思い出してください。彼らは決してエリートではありません。お金持ちでもありません。街の中小企業の経営者たちです。

弁護士(ポール・ハリス)、石炭商(シルベスター・シール)、鉱山技師(ガスタバス・ローア)、洋服屋(ハイラム・ショーレ)、印刷業(ハリー・ラッグルズ)、不動産業(ウィリアム・ジェンセン)、製鉄所(チャールズ・シュワップ)、楽器製造(アルバート・ホホワイト)、保険業(チャールズ・ニュートン)、歯科医(ウィル・ネフ)、銀行家(ラッファス・シャピン)、葬儀屋(バーナード・アーンツェン)、鋳物業(フレッド・ツイード)、・・・これが創立1年目の会員13名です。

彼らは1年経って会員増強する時、なんと言ったと思います？大学出は二人で、エリートはいません。各業界のトップでもありません。名士でもありません。街の中小企業の店主ばかりです。どうやって、会員を増やすか。彼らは考えました。そして、「我々は正直者である」と言って、会員を増やしたのです。そうです。ロータリーには、その誕生から、根底に「倫理基準を遵守すること」、言い換えれば「**四つのテスト**」の思想が流れているのです。

日本の昔の商家には、家訓とか家憲とか言われるものがありました。「積善の家に余慶あり」とか、「のれんに傷がつく」とかいう表現があります。古くから日本にも**職業道德観**は厳として存在していました。

まとめになりますが、職業奉仕とは、一言で言えば、「自分の毎日やっていることを、” The Four-Way Test” に照らしてやるんだ」ということです。

ロータリーから見たときに、邪道と思われる道を通らずに、ひたすら正道である奉仕の道を登って成功という山の頂上に出ること。そこまで完結して初めてロータリーという職業奉仕が出来たことになります。

人の価値というものは、結果ではなく、その人生の過程（プロセス）であります。
その生涯をどのように生きたかということであります。

ロータリアンには、定年も卒業もありません。

ロータリー運動を機会に、始められた「人生の真理の探究」は、より高い次元へ向って、その内容の質を高めながら、終生続けられなければならないのです。

わたしは無駄に この世に生まれてきたのではない
また人間として生まれてきたからには
無駄にこの世を 過したくはない
私がこの世に生まれてきたのは
私でなければできない仕事があるからなのだから
それが社会的に高いか低いかな そんなことは問題ではない
その仕事があるかを見つけ
その仕事に精一杯の魂を 打ち込んでゆくところに
人間として生れてきた意義と
生きてゆくよろこびがあるのだ

ご清聴有り難うございました。

.....

参考文献：

雑誌「致知」2008年1月号、2008年12月号

「自分を育てるのは自分」東井義雄 致知出版社

「クリスマス・キャロル」原作＝チャールズ・ディケンズ

「坂村真民詩集」大東出版社

「相田みつをと私」毎日新聞社

[A Talking Knowledge of Rotary] ガイ・ガンディカー（ロータリー通解）（小堀憲助訳）

「ロータリーへの私の道」ポール・ハリス

「Golden Strand」Oren Arnold

「職業奉仕私観」「ロータリー道徳律と職業宣言」「職業倫理」「職業と人生」佐藤千寿

「ロータリーでいう職業奉仕」神守源一郎

「ロータリーの源流」田中毅

「江戸に学ぶ企業倫理：日本におけるCSRの源流」弦間明＋小林俊治監修、日本取締役協会編集

「三方よし」の理念」同志社大学経済学部教授 末永國紀